

に戻る事が出来ました。そして、やっと佐世保に上陸し五日程で夢に見た熊本の地に着きました。そして、それから一人娘が成長する三十四年迄は毎日毎日、血の出る様な世渡りでした。

## 満州より引き揚げて

宮崎県 日 高 萬壽子

私の母方の祖父は、台湾総督府が出来た時役人として台湾に渡り、母は明治三十年に台湾で生まれました。その後台湾で一緒だった後藤新平が初代満鉄総裁になられた時、招聘されて満州へ行き撫順炭鉱の庶務課長となり撫順炭鉱の基礎を築きました。父方の祖父は家族を長野県松本に置いて満州へ学校長として単身赴任していました。

私の父は旅順に中学校が出来た時に松本中学校から転校し、旅順中学の第一回卒業生となりました。現在の阪大を出て満鉄の地質調査部に勤務し、仲人でもある木戸

忠太郎（木戸孝允の息子）鞍山製鉄所を築きました。その後、父方の祖父と撫順で南満火工品会社を作り、後に日本火薬が買収に来た時父は会社を辞め大久保鉱業所を立し、ホタル石、シャモットその他の鉱山業を営んでいました。朝鮮にも鉱山があり、廃鉱となつている金山を戦時に日本政府が二十万で買いに来ました。

私は大正十一年大連で生まれ撫順で育ちました。満鉄マンの主人と結婚し結婚後まもなく主人は応召、同じ日に満鉄マンの兄も応召。父は普蘭店という所の支店の支店長が応召したので、そこへ仕事の応援にいつていた時終戦となりました。父は技術者としてパロと呼ばれていた中国共産党に連行されました。姉婿は満州飛行機に就職していましたが、過労が元で終戦の年に亡くなりました。姉は我が家に帰ってきました。

二十一年二月、母と妹と私と女ばかりのところへ暴動が起きました。共産党が北へ逃げ、国民党がやって来る一日の無政府状態の時、我が家は暴動の中国人百人位に取り囲まれ襲われました。二階にいた私は逃げる間がなく、子供を背負って天井裏へ逃げ、生きた心地もあ

りませんでした。

私は二十年二月に長男を誕生しました。終戦後ミルクも思うようになく、栄養失調と肺侵潤で隣組の人達と一緒に帰国出来ないほど病状が悪かったので、その時期の一番最後の引き揚げ団体に入れて貰って、住み慣れた思いであふれる土地をむなししい思いで去りました。

船に乗るコロ島までは、現在のコンテナを載せる屋根も無いもないマナ板のように板だけのものに乗りました。落ちないように必死でした。病気の子供を抱えて着替えと食べるもの（私はオシメを洗うバケツ等も）と持てるだけの荷物に、千円だけ持って帰ることが許されました。女だけの旅でした。コロ島で船出を待つ間の二週間、待機する家は一杯の人で座るだけの空間しかなく、足を伸ばせないで足を抱えて眠ることがどんなにつらいものであるかを知りました。

明日日本へ上陸という船の中で一歳半だった子供の病状が悪化し、医者から明日まで持たないと言われましたが、そのことを知った姉の友人が（その頃の新薬でトリアノンといったかと思うのですが）「弱い子供のために持っ

てきましたが無気にごままで来たのでこの薬を上げます」といってくださいました。それを飲ませますと奇跡的に持ち直しました。

佐世保に上陸したものの、病気の子供を抱えて主人の郷里である宮崎までの単独行動は無理なので、母について父の郷里である松本へ引き揚げました。松本には父の七人兄弟の一番末の妹が養子を取って後を継いでいましたので、そこへ満州から引き揚げて来た三兄弟の家族が身を寄せました。

祖父の代から三代、皆満州を愛し、中国人を愛し、仲良しになり、満州のために尽くしましたが、やはり侵略だったのですね。何事も日本人優先でした。三代で築きあげた財産を残し、中国人達は我々が残していった多くの文化的、生産的資産を感謝したと思います。私の親戚にあたる横田という方は、果物の生産を指導し、果物の名産地となり、中国人から銅像まで立てられて感謝されました。

北滿に居られた方々はソ連の戦に巻き込まれ、難民として我が家の隣の小学校へ収容されましたが、チフス等

にかかって亡くなっていくとのことです。考え無量でした。

我が家にも北から逃げてきた方が親子六人同居されました。又、兵隊から逃げてきた方も住まわれました。

主人が応召された所は北満でした。千人程の部隊は十七人を残して南方へ行き、海上で魚雷にやられ全滅と聞きました。主人は居残り組の中に感謝でした。

終戦後は敗戦を信ぜず、馬賊になって戦うのだと白頭山に向かってトラックを進めました。ソ連の兵隊とはちあわせになり、トラックは没収、兵隊は捕虜になりました。主人は運転していたので隙を見て隠れ、逃げる事が出来ました。それから朝鮮に入り、山また山を六十五日間歩いて三十八度線突破し開城に到着し、それより、汽車、船に乗り仙崎港に上陸しました。

私達家族は命あって母国へ帰り着きましたが、多くの痛ましい難民の方々、又、孤児の方々を思い、この方々の犠牲の上に今日の平和があることを思い感謝で一杯です。

## 旧満州引揚げ私の意志でない

三重県 西島 好夫

渡満から終戦まで

私は昭和六年四月、二十二歳で満州に渡った。

「俺も行くから君も行け、狭い日本にや住み飽きた。

波の彼方にや支那がある、支那にや四億の民が待つ。」

この歌詞の歌は、

馬賊の歌とも革命歌とも言われ、大正から昭和にかけて日本全国青年の、満州大陸への憧れの血潮を湧かせたものだった。

この風潮に刺激を受けた私も、「大志を抱いて大陸に渡ろう」と密かに心の中に夢を描いていた。

商船学校を卒業して国家試験に合格、甲種一等機関士の海技免状を取得、大連汽船株式会社に就職が決まって、勇躍大陸に第一歩を踏み入れた。

当時世界に誇っていた我国海運界で、日本郵船、大阪商船に次ぐ、しかも満州大連に本社のある会社に入社出